

東日本大震災後の漁師小屋及び漁業の再編プロセスに関する研究
 —岩手県釜石市両石町を対象として—

Research on fishermen's sheds and fishery restructuring process after the Great East Japan Earthquake
 -Case study of Ryoishi town, and Kamaishi City, in Iwate prefecture-

○水越塔子¹, 井本佐保里²
 ○Toko Mizukoshi¹, Saori Imoto²

Abstract: This study reveals the reality of changes in the fishing industry and fishermen's sheds after the earthquake. In order to resume fishing quickly, fishermen used a common warehouse, tents by the Reconstruction Agency and sheds that had prepared by themselves. When the construction of infrastructures began, the fishermen's sheds was moved in order to continue fishing in response. Currently, the area around some fishermen's sheds is being renovated and used for hobbies and daily life.

1. 研究の目的と背景

2011年3月11日に発生した東日本大震災では多くの漁村集落が被害を受けた。早い漁業の復旧、復興を課題とする一方で、度重なる住居移転や大規模造成工事によって、地域住民を取り巻く環境は大きく変化した。本研究では、漁業形態や漁師小屋の変化の実態について明らかにすることで、今後の漁村集落の復興計画に寄与することを目的とする。

2. 調査概要

本研究は岩手県釜石市両石町を対象地域とする。令和3年8月23-27日に、3名の住民(漁師)に対して、両石町の震災後から現在までの復興の変遷や漁師小屋の実態についてインタビュー調査を行った。

3. 震災後の漁師小屋及び漁業の再編プロセス

3.1 被災状況(Fig.1)

津波により、両石町では約9割の家屋が津波被害に遭い、地域住民は地区外の仮設住宅等に移動した。また、漁船や漁具、漁師小屋等の漁業関連施設も流失した。

3.2 漁師小屋及び漁業の再編プロセス(Fig.2)

①2012年-2014年「漁業復旧期」：震災直後は共同倉庫の改修、漁船の修繕や設備の据付けをする造船所の

建設が行われた。当初は復興庁から貸与された少数の漁船で共同操業を行っていた。20人程がウニやアワビを収穫した後、共同倉庫で他の漁師仲間と作業を行い、均等に収益を配分していた。その後、漁船や漁具が増え始めるとワカメやホタテ等も収穫されるようになり、徐々に漁業が復旧する。2013年に復興庁からテントが貸与されるまで、共同倉庫以外にも漁具をしまう場所を確保するために、元の自分の敷地に漁師小屋を自力で整備する事例も見られた。さらに復興庁からテントが貸与された後も、漁獲量の増加につれて漁具が増えたため、自己敷地への整備は増えた。

②2015年-2017年「宅地整備期」：宅地や低地部、道路の整備を進めるにあたって、自分の敷地に建設した漁師小屋の多くが、海岸沿いや集落の東側に移動された。その後も、海岸沿いには復興庁によるテントが少しずつ増えていった。2015年には、上屋(組合を通して業者に漁獲物を売ったり、漁獲物の選別を行ったりする場所)や釣具店の再建が行われた。また、造船所も低地部の建設工事の影響で2017年に現在の場所へ移転した。

③2018年-現在「再定住期」：災害公営住宅、自力再建住宅の建設が完了し、両石での再定住が始まる。ワカメを獲る漁師は道具が多いため広いスペースが確保できる北側(Map3 a)、ウニやアワビを獲る漁師は共同倉庫が近い側(Map3 b)、定置網や大きい漁船を利用する漁師は広いスペースが確保できて、波が小さい湾奥である西側(Map3 c)というように、用途に応じて漁師小屋の配置が決まられていった。

4. 事例

①case A(70代・夫婦2人世帯・自力再建住宅)：被災して半年後は甲子地区、2016年からは天神町地区の仮設住宅から漁に通っていた。両石の瓦礫撤去や養殖の準備を行い、2011年11月に共同で漁を再開した。

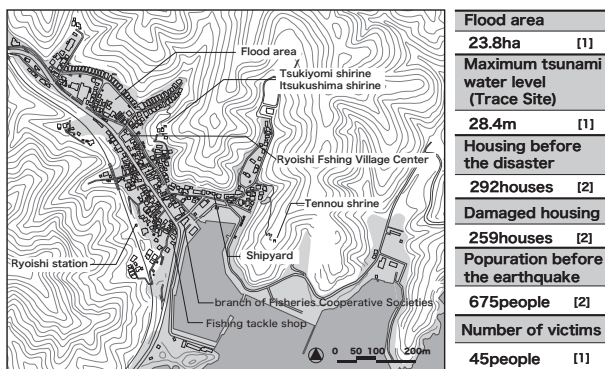


Fig.1 : Map Ryoishi town and damaged situation

1 : 日大理工・学部・建築 2 : 日大理工・教員・建築

復興庁からテントが貸与されるまで、自分の敷地に単管パイプで簡易的な小屋を建てており、2014年にテントが貸与されると、自分の敷地にテントを設置した。翌年、宅地整備が始まったため海岸沿いにテントを移動させ、現在に至る。

②case B(70代・夫婦2人世帯・自力再建住宅)：震災前は会社員の傍ら漁を手伝っており、漁師小屋は未所有であった。被災後、小佐野地区の仮設住宅から漁に通い、2013年にはBが所有する貸家の跡地に購入したプレハブと簡易的な単管パイプの小屋を建てた。2015年に宅地整備のため集落の東側に移動させ、現在は小屋周辺で畑を耕し、家庭菜園をしている。

③case C(60代・夫婦2人世帯・自力再建住宅)：震災前、郵便局員から漁師に転身した。被災後は、釜石市鶴住居の仮設住宅から漁に通い、漁師仲間と購入したプレハブを倉庫として共同利用していた。ウニやアワビの他にワカメも獲っており道具が多く、復興庁によるテントも、海岸沿いに設置して利用している。

5. まとめ

震災後は、少ない漁船で早期に漁を再開させるために共同操業や共同倉庫の改修が行われた。また、共同倉庫や復興庁から貸与されるテント以外にも、個人で漁師小屋の整備を行うことで漁を再開したり足りないスペースを補完していた。一方、宅地整備期に入ると復興事業の工事により、漁師小屋等を移動させながら漁を継続していたことが分かった。時間の経過と共に、漁師小屋の一部は増改築や周辺の使いこなしが起こっており、漁以外の趣味や生活のための拠点としての役割も見出せた。

6. 参考文献

- [1] 釜石 HP, 「第 28 回釜石市復興交付金事業計画」
https://www.city.kamaishi.iwate.jp/docs/2021031700033/file_contents/28_1-3-02.pdf (最終閲覧 2021/9/14)
- [2] 瀬戸元「両石町の歴史と震災復興」

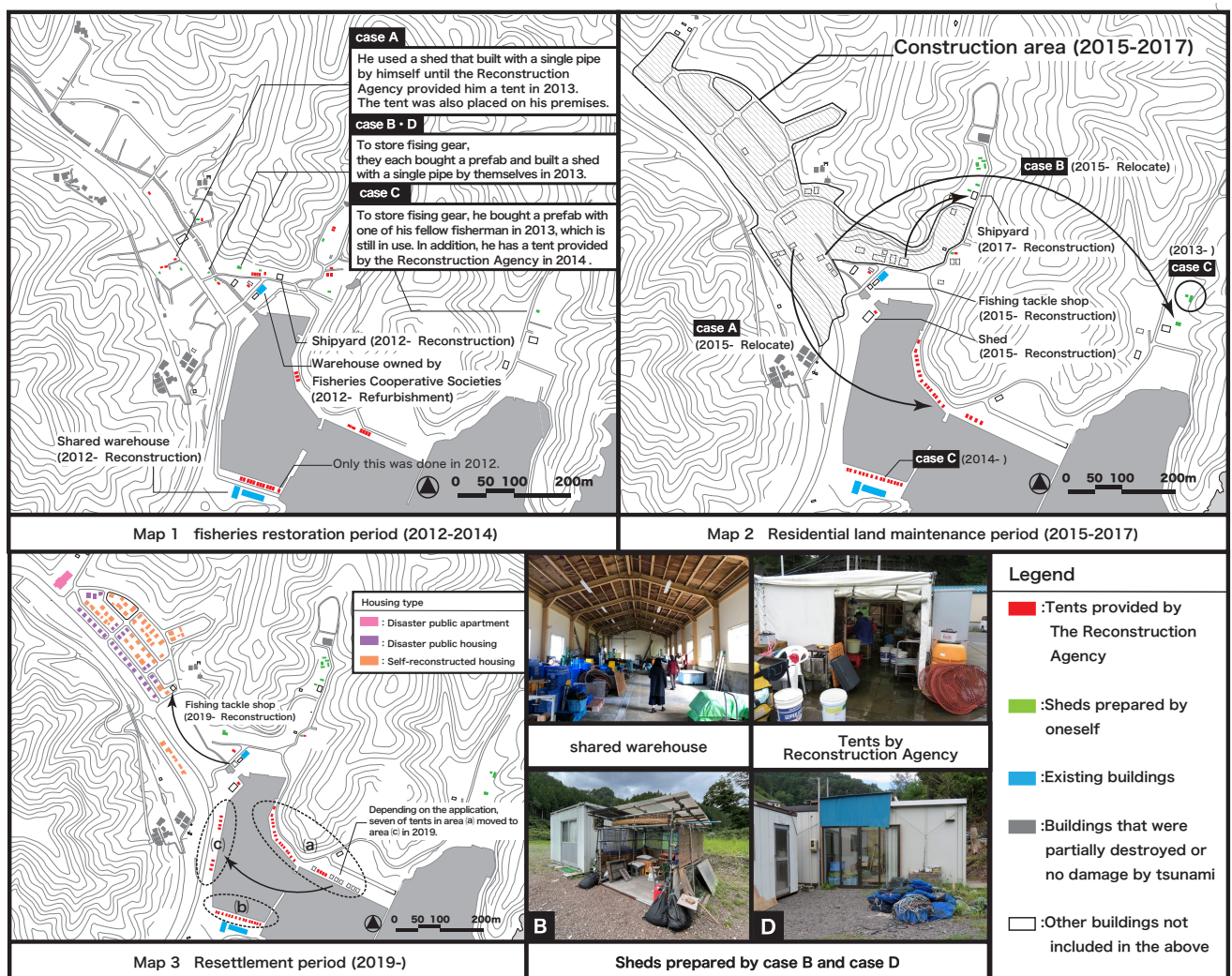


Fig.2 : Post-earthquake fishermen's sheds and fishery restructuring process